

KISS



AN UDO ARTISTS, INC. PRESENTATION 1977

ROCKNATION SPECIAL

スーパー・ロック・マガジン # 4

KISS

キッス

日本公演 ● JAPAN TOUR

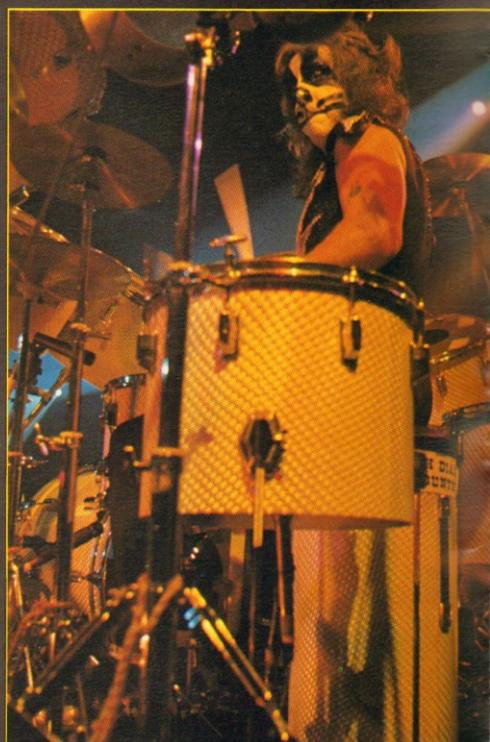
- 3月24日 大阪 厚生年金会館大ホール 主催○毎日放送
3月25日 大阪 厚生年金会館大ホール 主催○毎日放送
3月26日 京都 京都会館第一ホール 主催○近畿放送 京都音楽文化協会
3月28日 名古屋 愛知県体育館 主催○中部日本放送
3月29日 大阪 フェスティバルホール 主催○毎日放送
3月30日 福岡 九電記念体育館 主催○RKB毎日放送 ウドー音楽事務所
4月1日 東京 武道館大ホール 主催○文化放送
4月2日 東京(昼) 武道館大ホール 主催○文化放送
4月2日 東京(夜) 武道館大ホール 主催○文化放送
4月4日 東京 武道館大ホール 主催○文化放送

招請○ウドー音楽事務所
後援○ビクター・レコード
協賛○ウアン チャケット









日本公演
演奏曲目



- | | | |
|----|--------------------|---|
| 1 | デトロイト・ロック・シティ | DETROIT ROCK CITY (DESTROYER) |
| 2 | 燃える欲望 | TAKE ME (ROCK AND ROLL OVER) |
| 3 | レット・ミー・ゴー・ロックン・ロール | LET ME GO, ROCK AND ROLL (HOTTER THAN HELL) |
| 4 | 熱きレディス・ルーム | LADIES ROOM (ROCK AND ROLL OVER) |
| 5 | ファイヤーハウス | FIREHOUSE (KISS) |
| 6 | 果しなきロック・ファイアー | MAKIN' LOVE (ROCK AND ROLL OVER) |
| 7 | いかすぜあの娘 | I WANT YOU (ROCK AND ROLL OVER) |
| 8 | ゴールド・ジン | COLD GIN (KISS) |
| 9 | ドゥ・ユー・ラブ・ミー | DO YOU LOVE ME (DESTROYER) |
| 10 | ナッシング・トゥ・ルース | YOU GOT NOTHING TO LOSE (KISS) |
| 11 | 雷神 | GOD OF THUNDER (DESTROYER) |
| 12 | ロックン・ロール・オール・ナイト | ROCK AND ROLL ALL NIGHT (DRESSED TO KILL) |
| 13 | 狂気の叫び | SHOUT IT (DESTROYER) |
| 14 | ベス | BETH (DESTROYER) |
| 15 | ブラック・ダイヤモンド | BLACK DIAMOND (KISS) |



Gene Simmons



ジーン・シモンズ (ベース・ギター、ヴォーカル)

轟々しい狂熱に添えてステージに駆け上る吸血鬼ジーン・シモンズは、キッスのシヨウに自らの火を吐きつける。彼のイマジネーションは、ロン・チャゴイ時代の偉大なる怪物たちによってはぐくまれて来たインスピレーションを、ステージに引き継いだものである。彼は実際にあのイマジネーションの化身となる。

彼の音楽もあのイマジネーションそのものだ。ジーンと同じく、

音楽も血を滴らせ炎を吐くかと思われる。音楽を生きて動くものにするこの神秘な力は、キッスのシヨウにしか無いものである。ステージ衣装を身に着け、メーキャップをしていると、肉体的にも精神的にも自分が完全に変身してしまうのを感じる、とジーンは云う。過程はどうであれ、結果は、魔術的な打ち勝ち難い魅力を持つ悪の美しさである。





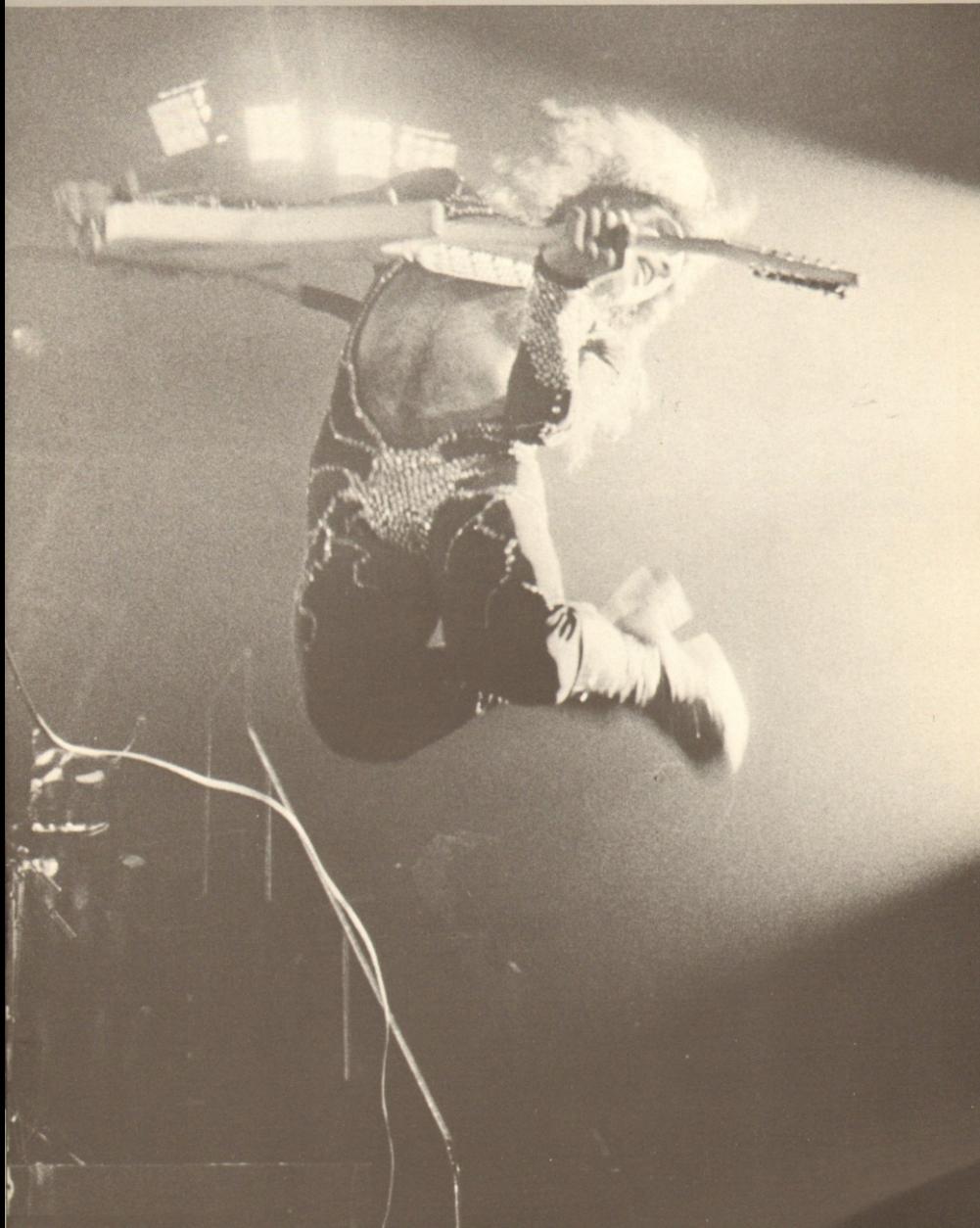
Paul Stanley



——ポール・スタンレイ (リズム・ギター、ヴォーカル) ——

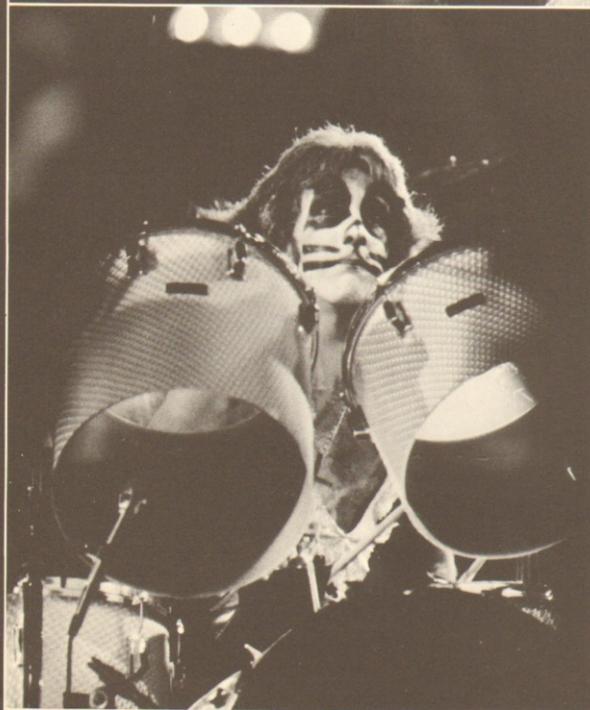
ポールがステージに姿を見せるや否や我々が感じるのは“LOVE”だ。男も女も、皆、等しくこれを感じる…ポールは男にとっても女にとってもラブなのだから。彼の体からは電気が波のように人々の間を縫って行き、音楽と親しみあふれる語りかけが彼の宇宙

の中心である魅力とないませられる。彼のファンタジーは、そのまま観る者のファンタジーとなる。限らない彼の愛は、あらゆるものに向けられあらゆるものから出、あらゆるものに注がれる。ポールは自分の情熱を音楽に変え、音楽を情熱に変える。





Peter Criss



ピーター・クリス (ドラムス、ヴォーカル)

ピーター・クリスは巨大な猫だ / 気をつける？しび歩く、しなやかな体の下には異常なパワーがひそんでいる。全本能を鋭ぎすまして、怒り狂ったようにドラムに襲いかかる。瘴気なジャングルの食肉獣の計算し尽されたコントロールを以て、ピーターは骨まで通

るショック電流を次々と送る。この動物的なバイタリティーがキッスのシヨウにしっかり織り込まれている。ピーターは、猫独得の動きの美しさと信じられない程のソフトなタッチを身につけている。噂によると、眠っている時度々喉をゴロゴロ鳴らすとか。





Ace Frehley

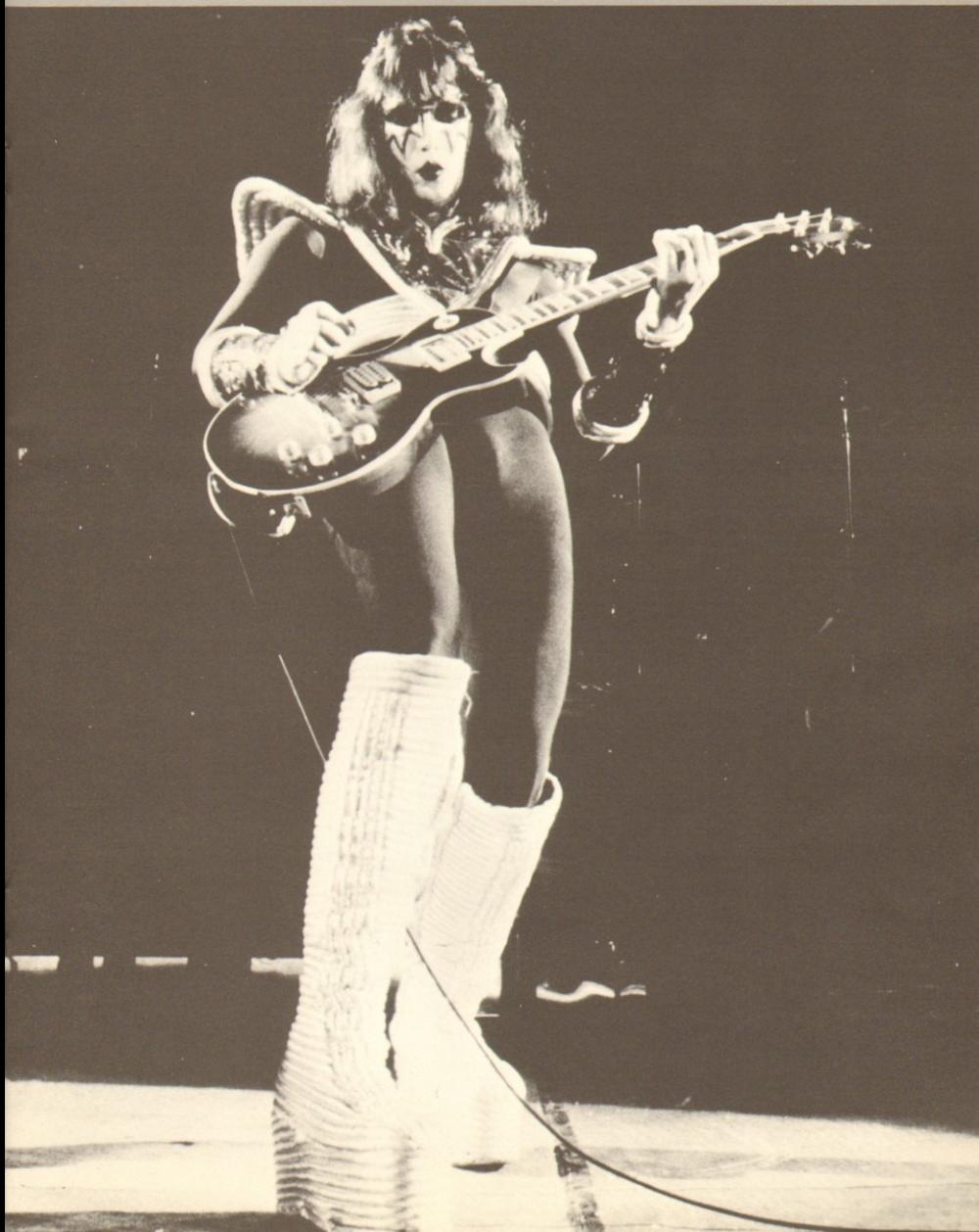


エース・フレイリー (リード・ギター、ヴォーカル)

エースは、大昔地球に座礁した宇宙人の一族から出た子孫である。だから彼のギターからはあんなにも宇宙的なエネルギーがほとぼしり出るのだ。次元の違う別の世界からの無気味な生物…地球上のどんな威力にもビクトもしない…が発する電波のように、エースのぞくぞく、ビリビリする様なサウンドは、心をしびれさせ、感覚に火

をつける。このサウンドに接すると、急に体が重力を失なって人間の能力を超えた跳躍ができそうな衝動にかられる。エースは常に重力の法則と戦っている。

地球から飛んで行ってしまわない為に、彼の靴には、実は重い磁石がとり付けられているのだ。



りりしく、強く、たくましく……
シンデレラ・ボーイたちの
新しい伝説

ロック界で、私はいくつものシンデレラ物語をきいた。昨日まで、場末のクラブで酔客相手に演奏をしていたミュージシャンが、今日は何千人ものファンの前で、華やかなスポットライトをあびていたりする。スターダムへの道は、魔法つかいが杖をひとふりするとさっと開ける、というわけにはいかないにしても、有名になりたい、スターになりたいというあこがれを胸に、少年たちは明日のシンデレラを夢みる。

ジーン・シモンズは10代の少年だった頃、ちょうど今のあなたのような熱烈なロック・ファンだった。ポール・スタンレイもそうだった。ニューヨークの下町で育ち、ニューヨークで行なわれたロック・コンサートにはほとんど行った。レッド・ツェッペリン、ローリング・ストーンズ、ヤードバース、グランド・ファンク・レイルロード、小銭をにぎってコンサート会場に出かけ、いつの日か自分もあのようにステージに立って、ファンの大歓声の中でギターを弾き、歌いたいとひそかに夢みていた。ただひたすらステージに立ちたい、人気者になりたい、あのようにカッコよく演奏したいというあこがれが、彼らの今日をつくったのだ。



キッスの出世物語は、アメリカのロック史の中でも、まれにみるシンデレラ・ストーリーである。血洗いをしたり、タクシーの運転手をしたりしながら、彼らは仲間を集め、1974年、キッズが結成された。それまでの4人、エース、ビーター、シーン、ポールは、ニューヨーク周辺のローカル・バンドのメンバーで、その日その日の喰いぶちをかせくのがせいっぱいという暮らしをしていた。誰がいい出したのが、今度は化粧をして演奏しようじゃないかということになった。

シーン・シモンズは幼い頃にみた日本の怪獣映画のことを思い出した。ゴジラが火をふき、建て物を破壊し、モスラと戦う。そんなシーンが好きで好きで、アメリカのテレビで放映されるたびに何度も何度もみた。今度やるロック・グループは、そんな怪獣の楽しさ、すごさをステージで再現できるようなグループにしよう、意見が一致した。彼はゴジラみだいに、ステージで火を吹くことを考えたし、黒づくめの奇怪な衣装も、素顔をまるでかくしてしまうメーカーキャップも、みんなて考え出した。

73年のニュー・イヤーズ・イヴ、ニューヨークのアカデミー・オブ・ミュージックに出演して、シーンは初めて火を吹いた。大失敗だ。頭の上に火がふりかかって、髪の毛が燃えた。もう2度とやるもんかと思った。が、翌日の新聞をみてシーンはとびあがった。「キッズというおもしろいグループがデビューした。ここベース・ギタリストは頭の上に火をつけて演奏する」

シーンは笑いこぼしながら、これだ、これだと思った。そして1975年のニュー・イヤーズ・イヴ、キッズはすでにニューヨークのナッソー・コロシアムに2万人の観客を動員して大コンサートを行なえる、超一流のスーパー・スターになっていたのだ。

私は彼らがデビューして間もない1974年6月、キッズのコンサートをみて以来、何度か彼らに会い、コンサートをみてきたが、いつも感動させられるのは、そのたくましいまでの明るさである。メーカーキャップをしない、普段の彼らは、まさにロック少年がそのまま大人になったような、熱烈なロック・ファンであり、レッド・ツェッペリンのコンサートをみた時の感動を、目を輝かせて語るし、メー

キャップをし、怪獣衣装に身を包んだ時は、ちょうど私たちが子供の頃、えんじちで買ったお面をかぶってふざけあった時のような、無邪きなおおらかさを感じさせる。

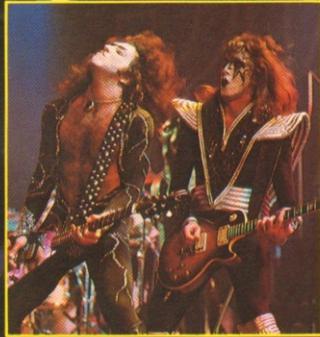
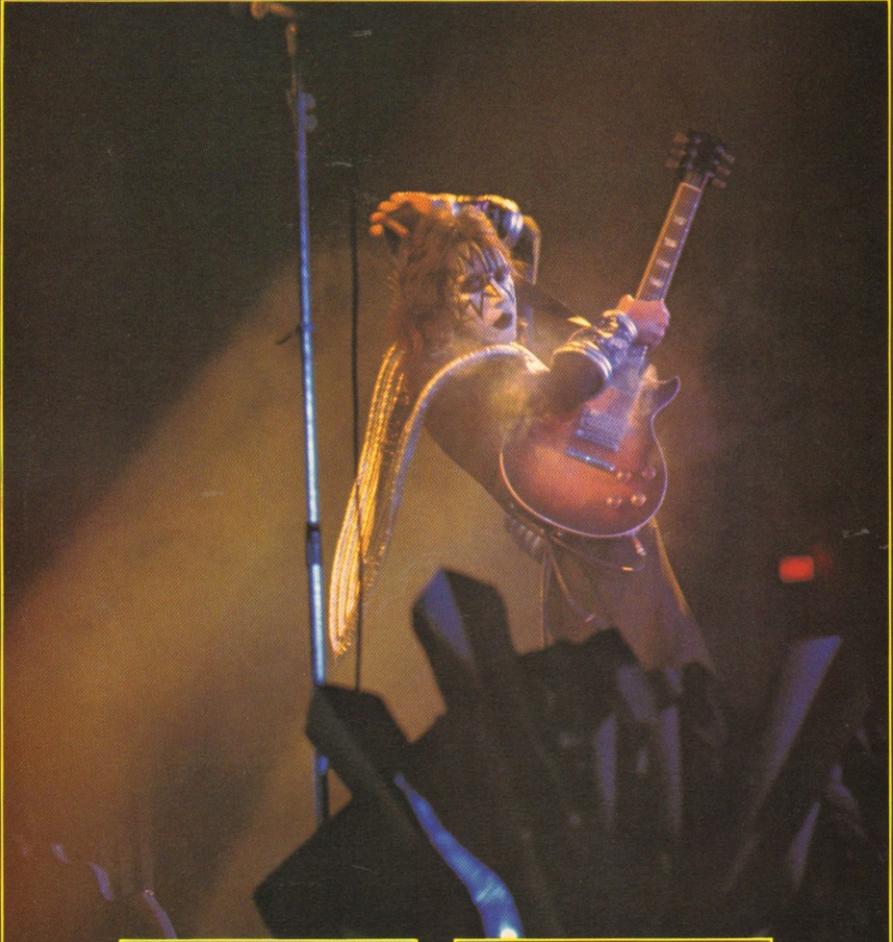
ハード・ロックが大好きで、きて楽しいみて楽しいステージを、自分たちもまた楽しみながら演奏したい——そんな少年たちの日の夢を、今たくましくたたきつける。

アメリカの10歳くらいの少年たちは、フットボールや野球の選手のりりしさとたくましさで強さにあこがれ、彼らの一挙一動を追い、写真を集め、記録を集め、そしていつか自分もあのようにたくましい大人になるとグラウンドを走りまわる。キッズはスポーツマンではなく、ロック・ミュージシャンだけれど、彼らの生み出すエネルギーは、もはやスポーツのエネルギーと同じように、アメリカ中の少年たちを強く刺激し、少女たちにも夢をみさせる。デビューから4枚目のアルバム「キッズ・ライヴ」をプラチナ・レコードにしたのをきっかけに、アメリカ、ヨーロッパ、そして日本をわがものにしたのである。ステージだけではなく、レコードにも非常にきめ細かな配慮がいき届き、それはひとえに、かつてロック少年として、ありとあらゆるコンサートに通い、レコードを買いあさった体験が、今生きているからだろう。

ハード・ロック、ただひたすら、ハード・ロック、それが僕の今やりたいこと。ポール・スタンレイは、胸をはってこう言った。彼はイギリスのハード・ロックに深く感動し、今でも自宅できくついている時は、インブル・パイやティープ・パーブルのレコードをきくという。ステージでの彼は、本当にワイルドのひとことに尽きる。作られた形だけの野生美ではなく、心やさしい、抱擁力のあるやさしさだから、誰をもとりこにしてしまう魅力でいっぱいだ。

キッズは1970年代のアメリカン・ロックが生んだシンデレラ・ボーイだ。スーパー・スターにあこがれて、ロックン・ロールにあこがれて、そしてついにスターになった。アメリカのロック・ビジネスは、そのスターダムへの道のりの確かさにおどろいている。ビーター・フランプトンは、7年間かかった。キッズは、1年でやってのけた。

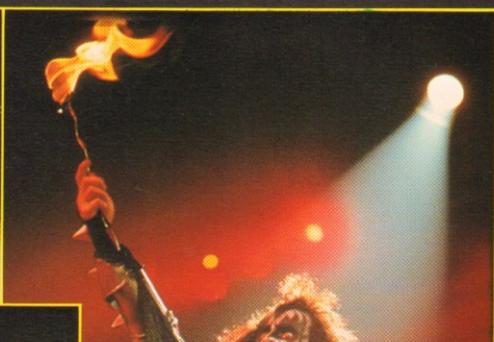
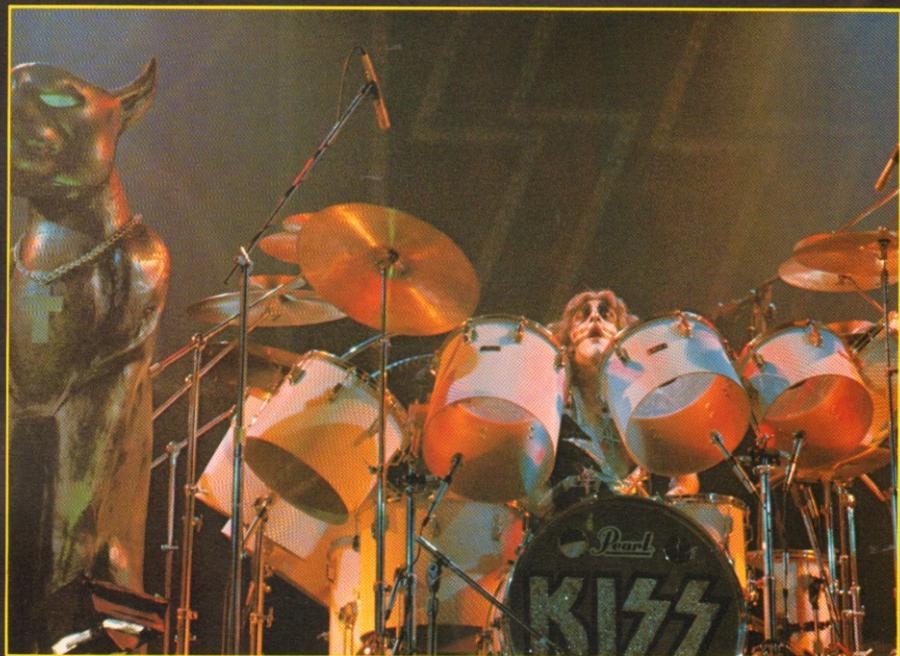
水上はるこ（ミュージック・ライフ編集長）

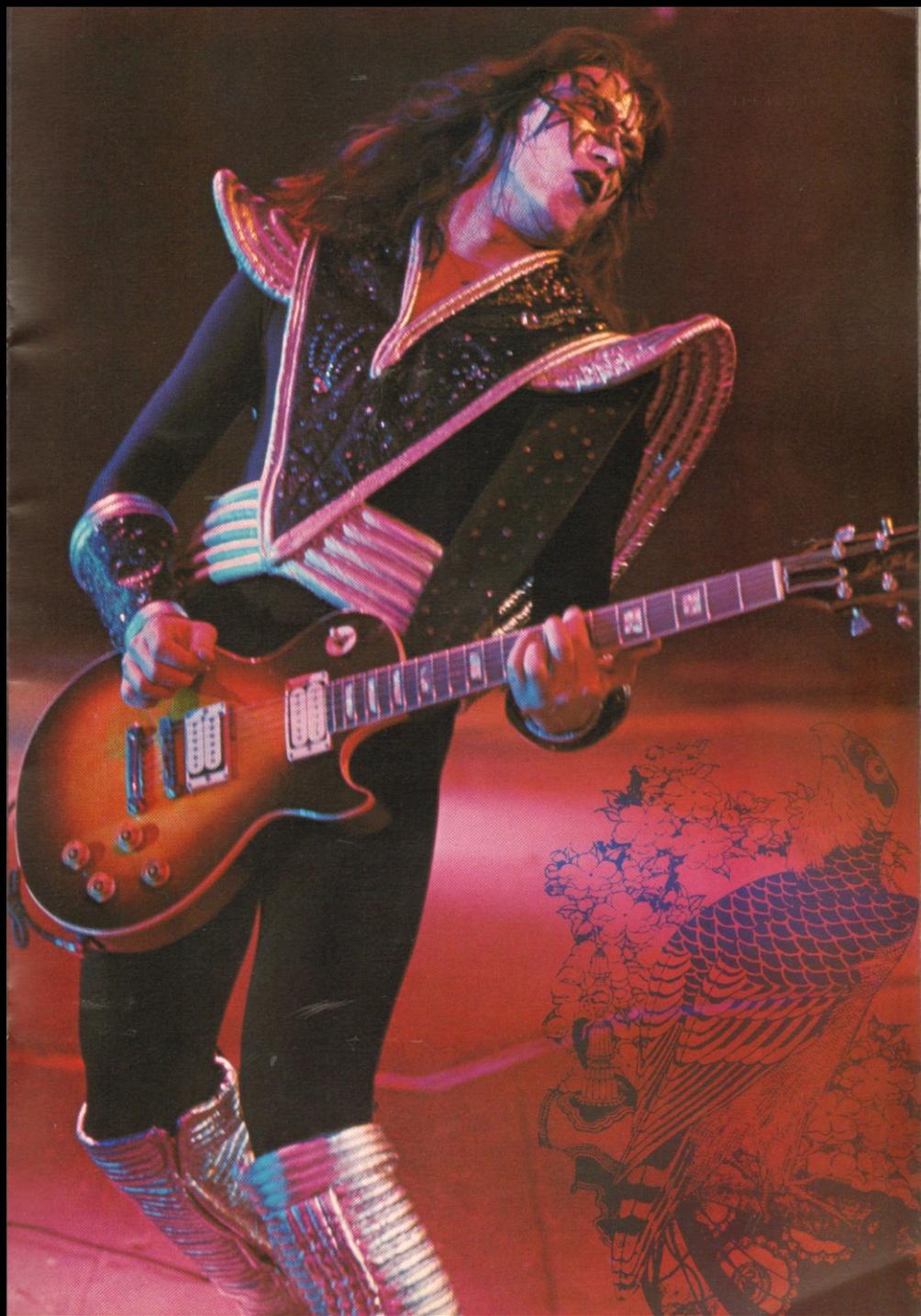


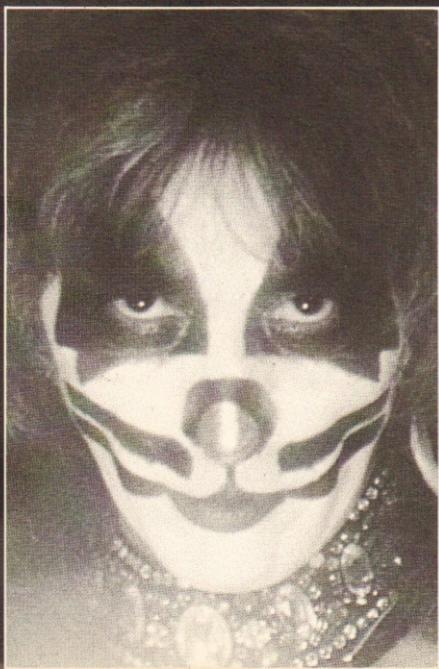
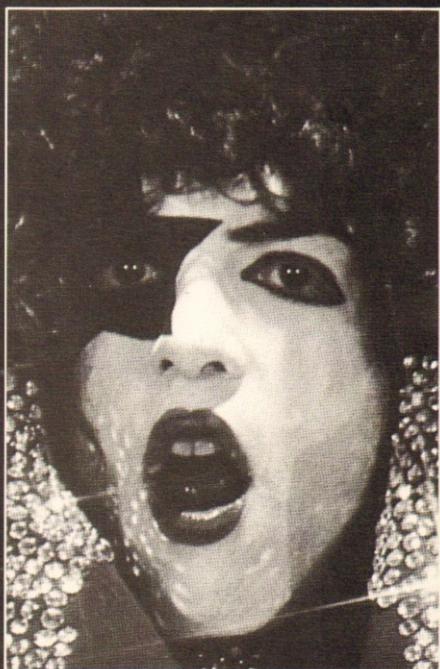
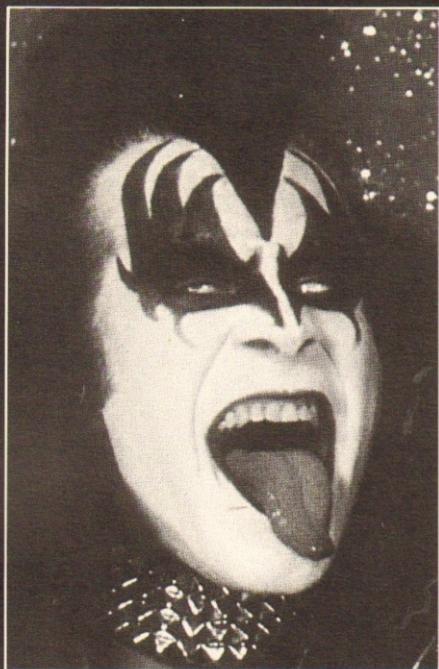
























KISS



開局 **25** 周年

土曜の夜はロック!!
ROCK'N ROLL
IS
JOQR

海外アーティストの日本公演から日本のロックまで
ステージ録音を中心に

「ROCKUPATION '77 スペシャル」

土曜・深夜1:30~2:30

JOQR 1130KHz.
文化放送

D.J 梶原 茂





AN UDO ARTISTS, INC. PRESENTATION 1977